

# 2010 年度大学教育学会課題研究集会（武庫川女子大）

## 参加報告

<はじめに>

11月27-28の両日、2010年度大学教育学会課題研究集会が武庫川女子大学中央キャンパスで開催された。事前申し込みでは約340名（最終日公式発表412名）が参集し、「キャリア形成における大学教育－ライフサイクルの視点から－」という統一テーマのもと、基調講演と開催校企画シンポジウム各1件、企画委員会シンポジウム3件が開催された。この研究集会は基本的には大学教育学会の補助金を受けた課題研究の発表会であるが、昨今の就職氷河期以上を迎えたこの時期、まさに時機を得たトピックであった。

本学FD委員会からも5名が参加して情報収集し、意見交換してきたので、その概要を分担して報告したい。

<基調講演>

「大学教育とキャリア形成－ライフサイクルの視点から」

井下 理氏（慶應義塾大学）

井下氏は自己のキャリア紹介をするとともに、「キャリア」を狭義の「学生の就職対応」ではなく「生涯にわたる社会人としての能力形成」と幅広く捉え、大学教育の役割について昏迷期の今の時代に対応しながらも、長期的展望を持つ重要性を踏まえながら私見を述べられた。特に、大学と社会：大学の使命と目的、大学教育を取り巻く環境の変化、人的要素（教員、職員、学生、経営管理者）などにふれながら、ライフサイクルから見た大学教育のありかたについて講演された。それはある意味でこれまで展開されてきた大学の正当な教養教育の目指すところであり、長い生涯に対応できる能力を育成することである、ということであった。ただし、このことは旧来の教養教育でよいということではもちろんない。新しい学士課程教育という教育観のもと、キャリア教育というものをどう考えどう構想し、どう身につけられていくかということであった。その意味で、平成23年4月からの大学設置基準の改正に盛り込まれたキャリア教育対応の改正文言では狭いキャリア教育になりかねない危惧が窺えた。

さて私見であるが、約40%の学生は将来の進路志望を見定めており、早期から専門教育を志向するデータもあるため、その意味では講演内容と現実との折り合いをどう取るかという課題も窺えた。しかしながら、ライフサイクルという長いスパンで大学教育の使命と役割を見る視点は重要であり、大学自体も自らを絶えず見直し、再編・統合しながら生成過程にあるものとして位置づけることは意義深いことである。このような視点からFD・SD・BD（Board of Trustees：経営管理者）が展開される必要性を訴えた講演であった。特に、BDについてはあまり本学を含め実施されていないため、本学の部署で該当される方々を含め、多摩地域の連携を含め、切磋琢磨される必要性を感じた次第である。

（大学教育センター：舛本直文）

## < 開催校企画シンポジウム >

慶応義塾大学 井下 理氏の基調講演に続き、2010年度開催校企画シンポジウムが、下記にて行われた。

シンポジウムテーマ：「キャリア形成における大学教育ーライフサイクルの視点からー」

司会：矢野裕俊氏（大阪市立大学）、山崎洋子氏（武庫川女子大学）

シンポジスト：

福島秀行氏（武庫川女子大学）、川嶋太津夫氏（神戸大学）、田中每実氏（京都大学）

コメンテーター：大内章子氏（関西学院大学）

はじめに司会の山崎氏から、今回のシンポジウム企画について次のように説明があった。

「青年の就業が社会問題化するとともに、キャリア教育が法制化され、大学が将来の職業生活への準備に向けた教育内容や教育方法をどのように提供するかが大きく問われてきている。しかし他方、大学は、中年期や老年期を含めた多様な世代の人々が集い、そこでの豊かな学びをとおして生きることに再び向き合い、生涯を再構築する場ともなりつつある。これに加えて、大学には、スタッフたちが自らの成長をめざす"FD" や"SD" を展開することも求められている。大学におけるキャリア形成について考えるためには、多様かつ複合的な視点から検討・考察することが不可避である。開催校企画シンポジウムでは、大学を<多様な年代の多彩な人々がライフサイクル全体をとおして織り成す、複合的なキャリア形成の場>と捉え、このような視点から、大学の教育機能について「複合的に」アプローチし、総合的に議論したい。各シンポジストからは、女子大学における青年期のキャリア教育、キャリア教育の在り方、複合的なキャリア形成といった観点から現状、問題点、課題などについて述べていただく。これらの議論に対してコメンテーターの意見を得た後、フロアを含めた全体討論を行うことにしたい。」

次にシンポジストである武庫川女子大学 福島秀行氏より「武庫川女子大学におけるキャリア教育への取り組み」と題して報告が行われた。昨今の就職活動の早期化、長期化により大学だけでなく企業にとっても多くの問題をもたらしている。また概して“打たれ弱い、生きる力の弱い”学生の質的变化に現在のキャリア教育は十分に機能しているとはいえない。武庫川女子大学は初年次からキャリア支援セミナーなどを行い対応しているが、新入生の4人に1人は意欲も基礎学力も低く多くの指導が必要であり、他方放任していても自力で進んでいける学生も4人に1人のみとなっている。武庫川女子大学キャリアセンターでは種々の取り組みを行っているが、当然最初の4分の1の学生には対応が困難となっている。本質的に必要な施策は、人材育成を社会制度として位置づける仕組みづくりであり、キャリア教育も単に大学だけでなく社会全体で推進すべき重要課題となっている。

次に神戸大学 川嶋太津夫氏より「今求められるキャリア教育の背景とその在り方」と題して講演が行われた。我が国では大学卒業生の5人に1人が進学も就職もしないまま大学を卒業し、たとえ就職しても8人に1人は1年以内に仕事を辞めている。こういった状況を打破するためには大学でのキャリア教育の充実が必要となっている。大学では、1) 卒業時での就職、2) 卒業時の就業力、3) 持続的就業力を学生に持たせる必要がある。特に重要なのは3) であり単なる職業能力、就職能力ではなく、社会人として職業人として

生涯自律して就業することを可能とするような基礎的、基盤的な能力の育成が求められている。このような能力の育成には、新規組織や科目開設など「付加的」に対応する傾向が多いが、本来はきちんと教育課程に「埋め込む形」での取り組みが望ましい。

最後に京都大学 田中毎実氏より、『学問教育共同体』の現代的再編成について」と題して講演があった。ここでは 100 年前に職業紹介事業体験をまとめた **Frank Parsons** と **Parsons** の理論を拡大し持続的変化（人生形成、自己概念形成）に着目しキャリア形成を体系化した **Donald Super** について紹介があった。短期的・集中的な職業指導も必要であるが、本来は大学の教育機能全体を通して、生涯にわたるキャリア形成の流れへ位置づけられるべきである。結局、キャリア形成の中核は若い世代の職業選択の支援である。この支援は 1) 若い世代の生涯を通じたキャリア形成に位置づけられるべきであり、2) 多様な世代の複合的で相互的なキャリア形成のなかで力を得ることができる、と結論された。

3名のシンポジスト講演の後、関西学院大学 大内章子氏より基調講演および3講演に対するまとめとそれぞれに対するコメントが述べられた。今後の課題について、1) 開かれた大学、2) 教育課程全体の連携、3) 企業と地域、家庭との強調、4) きめ細かな対応としてまとめられ、さらに個人が生涯にわたって大学を利用したくなるシステムを作ることがキャリア支援に重要とのコメントが述べられた。

さらに休憩を挟んで、パネルディスカッションが行われ、武庫川女子大学生からの質問も交え、フロアとの活発な議論が行われた。

(基礎教育部会長：渡部泰明)

## <シンポジウム I (11月28日 9:30~12:00) >

学会2日目午前中のシンポジウム I では、「構築中の学士課程教育：プロGRESS・レポート」をテーマとして、質保証を伴う学士課程の構築の現状と課題について、先導的な2つの事例も含め議論された。

最初の発表は、串本剛氏（東北大学）による「私学高等教育研究所学科長調査からみえる学士課程教育改革の現状と課題」であり、学科長を対象とした各大学における学士課程教育の構築状況に関する調査の結果をもとに、学士課程教育改革の現状と課題について述べられた。学習成果を担保する方法として、評価の機会が教育課程を構成する各科目に埋め込まれている累積方式と、評価の機会が各科目から独立してある包括方式がある。単位制を採用している日本の大学では、一部の国家試験につながる分野を除き累積方式を顕著化する方向であるが、その際、明示的な累積方式の条件となるのが、「明文化された教育・学習目標」、「目標と授業科目の関連付け」、「GPA による卒業判定」である。また、これらの条件を満たしている学科の割合や、満たすための障壁についてもまとめられた。

次に、上真一氏（広島大学）が「広島大学到達目標型教育プログラム(HiPROSPECTS)」というタイトルで発表された。広島大学では、社会の変化に迅速に対応し、教育の質の向上と卒業生の質を確保するために、卒業生に求める能力等（到達目標）を明確にし、それを身につけた学生を社会に輩出する教育として、到達目標型教育プログラム(HiPROSPECTS)を導入している。到達目標は、「知識・理解」「知的能力・技能」「実践的能力・技能」「総合的能力・技能」の分類からなり、到達度の評価は各科目の成績評価とは別に行われ、これに基づき学生個別にチューターから指導が行われている。本発表では、HiPROSPECTS の特徴について詳しく説明があり、これを改良した新しいシステムの構築についても触れられた。

最後の発表では、山本秀樹氏（関西国際大学）が「アメリカ UMR に学ぶコンセプトマップを用いたカリキュラム構築の手法」と題して、ミネソタ大学ロチェスター校で採用されているコンセプトマップを用いたカリキュラム構築の有効性と、日本への導入の課題について述べられた。コンセプトマップは、「概念地図」とも言われ、発想を概念ごとに整理し、相互に結びついた概念間の関係性を矢印や実線で連結することによって視覚的に表現した図である。コンセプトマップはカリキュラムマップの作成に有効である他、科目間の相互作用の議論の活性化や、効果的な学びの促進などが期待できる。

発表終了後、コーディネータの川嶋太津夫氏（神戸大学）やフロアから多数の質問が寄せられ、活発な議論が行われた。特に、上氏の発表について、到達度の評価方法についての議論に多くの時間が割かれた。

(教務委員長：山下 英明)

### <シンポジウムⅢ (11月28日 13:00~15:30) >

テーマ 共通教育のデザインとマネジメント

シンポジスト:「本課題研究の目的と計画」 吉永 契一郎 (東京農工大学)

:「新潟大学の全学共通教育のデザインとマネジメント」

濱口 哲 (新潟大学)

:「京都文教大学における共通教育の15年」 中村 博幸 (京都文教大学)

吉永氏からは、1999年に実施された「大学の教養教育に関する実態調査」による現状をもとに、それらの状況が、その後どのように変化しているのかを含めた課題提起がされた。いくつかのポイントとして、“スリム化・スキル化”“多様な教養の概念”“担当者の変化”等をあげることができる。スリム化に関しては、その後の河合塾国立大学調査(2007年)吉田文(早稲田大学)氏の教養教育調査(2003年)によっても明らかにされており、卒業要件単位数の圧縮は、ほぼ教養教育要件の圧縮に対応している。スキル化に関しては、情報教育程度であったものが、次第に初年次教育やキャリア教育等、幅広い範囲をカバーするようになってきている点に見ることができる。そして、大学のレベルも多様になっている中で体験型教育、キャリア教育、スキル教育、学習支援など様々な教養概念が生まれている。また、共通教育の担当者についても、大学教育センター等の組織に、語学、保健体育、自然科学基礎教育担当者を配置する事例や、キャリア教育や資格取得教育における外部委託の増加が見られる。さらに、共通教育・学士課程教育を充実させていくために、役職者のリーダーシップが不可欠という点も指摘された。

以降は、新潟大学、京都文教大学での取組が、濱口氏、中村氏より紹介された。

新潟大学では、大綱化以降、専門教育、共通教育における様々な課題への認識から教育改革が始まっている。そのデザインは、旧来型の一般教育と専門教育を廃し、育成する人材像に即した4年一貫の教育プログラムによる教育の実現であり、全学の教育資源(教員と授業科目)の共通化と人材育成目標に即した教育プログラムの構築に要約できる。教員については、所属を学部や研究科などの教育組織から切り離し、教育研究院と呼ぶ人事組織を構築した。これにより、教員は基本的に自らの専門性を踏まえ、必要に応じ全学の教育需要に応えることが任務とされた。また、授業科目に関しても、教養科目と専門科目の科目区分を撤廃し、授業科目に分野と水準(学問分野の体系の中でどのような位置付けであるか)を付し、学問分野の観点から授業内容の正当性を担保していく仕組みとしている。また、学部教育を「主専攻プログラム」として再編成し、プログラム毎にその学習到達目標を描き、そのために必要な授業科目から構成されるカリキュラムを提示している。

これらの動きは、全く新たなシステムを立ち上げているのではなく、旧制度の慣性力で列車を動かしながら、円滑に新しい路線に切り替えていると例えられており、その点が、教育活動を継続しながら改革を行っていく場合には重要と述べられていた。その際、大局的な方向性はぶれないようにし、マネジメントしていくことも必要と述べられていた。

(大学教育推進担当課長 岩野恵子)